

怪獣の 出る村

かいじゅう

角田光男／作・北島新平／画



怪獣の 出る村

角田光男／作・北島新平／画

怪獣の出る村

創作児童文学

第1版第1刷／1973年2月©

第6刷／1978年12月発行

著者／角田光男

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3

電話／東京03-861-1861（代表）

振替／東京0-64678

印刷／（有）協栄印刷所

製本／東京美術紙工

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付
下さい。送料 小社負担にてお取替えいたします。

913 角田光男

怪獣の出る村

金の星社 1978

185 P 22cm （創作児童文学）

基本カード記載例

8393-012171-1406

はじめに／角田 光男

イギリスのネス湖にいたといわれるネッシー、ヒマ
ヤの雪男、どちらもまだ正体のよくわからない怪獣です。
ところが広島県の北、比婆山にも、正体不明の怪獣が
あらわれました。

「これで世界の三大怪獣がそろったぞ！」

比婆山のふもと、油木の人たちはじまん顔ですが、さ
で、そこにいる怪獣は——。





もくじ

1	大ザルか、山人か ^{やまびと}	6
2	ばあやん.....	22
3	万平じじ ^{まんぺい}	31
4	雨のぼんのお客さん ^{きやく}	43
5	油木 ^{ゆき} からのおみやげ.....	60
6	一時 ^{いつとき} さんの約束 ^{やくそく}	81
7	やまわろの子ども.....	100
8	うそつき村.....	121
9	くらやみの比婆山 ^{ひばやま}	143
10	怪獣 ^{かいじゆう} の正体 ^{しょうたい}	160
	あとがき.....	183



角田 光男 (かくた みつお)

1924年，新潟県に生まれる。20年あまり新津市の小学校で教師をつとめ，のち，1966年上京して創作活動をつづけている。主な著書に「つむじまがりへそまがり」「友よまたいつの日に」などがある。

北 島 新 平 (きたじま しんぺい)

1926年，福島県に生まれる。信州の中学校で教師生活をおくり，1971年に上京して出版関係の仕事にたずさわる。「春駒のうた」「鬼押出し」「いればをしたロバの話」などの絵を描いている。

怪獣の出る村

かいじゅう

角田光男／作



創作児童文学

1

大ザルか、山人か^{やまびと}



日出男^{ひでお}くんは、かあさんの先^{さき}になって歩きながら、かいちゆう電燈^{でんとう}で、たえず、あっちこ、ちをてらしました。ササヤブの根^ねもただの、ドングリの木がこんもりしげったところなどを。

あやしいものは、なんにも見^みつかりません。かいちゆう電燈の光のわが、よわよわしいために、遠^{とほ}くまで見とおせないこともあります。一びきのネズミさえも、道の近くにいないようです。

「日出^{ひで}、なにしてるけえ。足もとを、ようてらしてくれんと、とがった

石をふみつけてばかりいるがな。」

かあさんが、こごとをいいました。

「うん。」

日出男くんは、へんじといっしょに、かあさんにいわれたように、ちよつとだけ足もとをてらしましたが、すぐにまた、かいちゆう電燈^{でんとう}を横にむけてしまいました。

日がしずんでから、まだ、それほど時間^{じかん}はたっていません。しかし、高い山にかこまれた村ですから、わずかのあいだに、まっくらになってしまいます。

日出男くんとかあさんは、前谷^{まえたに}のうちから、かいちゆう電燈をかりて、うちへ帰^{かえ}るところです。

前谷のかあさんが東京^{とうきょう}へいつてきたので、そのみやげ話をききに出かけたのでした。

ところが、はじめて東京へいったじまん話が、いつまでもつづきます。それで帰るのがおくれてしまいました。

トウモロコシ畑の横へきました。万平じじの畑です。日出男くんは、かいちゆう電燈のあかりで、ねんいりに、畑のすみずみまでなでまわしました。怪獣は、トウモロコシがすきだという、うわさもあります。

「日出は、さつきから、やたらとかいちゆう電燈をふりまわしてるが、怪獣がいるかとおもって、びくびくしてるんだな。」

かあさんの声が、わらっています。

「びくびくしてるんじゃないで。怪獣を見つけてやろうと、はりきってるんだからさ。」

日出男くんは、半分こわがっているくせに、いばった口をききました。畑のすみに、休み小屋があります。小屋といっても、木のえだをよせあつめ、屋根はわらをのせただけのものです。

日出男くんは、そこへもあかりをさしこんで見ましたが、ひりょうのあきぶくろだの、なわきれなどがあるだけでした。

「怪獣かいじゅうを見つけて、どうする気かえ。」

かあさんがたずねました。

「そしたら、前谷まえたにのかあさんみたいに、東京へいけるかもしれないだろ。かあさんだって、東京へ行ってみたいだろ。」

日出男くんが、そういいながら、かあさんの顔かおをてらしたときです。

かあさんが、目をまんまるにしてさけびました。

「ああーっ。怪獣ひでが日出ひでのうしろにいるっ！」

「うわっ！」

日出男くんは、かあさんのこしにしがみつきました。かいちゅう電燈など、おっぼりだしてしまつて。

怪獣などこわくないと、いばっていた日出男くんですが、まだ、小学

校三年生です。かあさんのさけび声に、きもをつぶしたのもむりはありません。

かあさんは、日出男くんをかばうかつこうで、しばらくだきしめていました。そのあと、日出男くんのせなかを、ぽんとたたいてわらいました。

「びっくりしたけえ、うそだっちゃ。」

いたずらなかあさんです。おかげで、日出男くんのむねは、どきどきと、まだはげしく音をたてています。

日出男くんは、かあさんのむねから顔をはなし、こわごと、うしろをのぞきました。

投げすてたかいちゆう電燈が、ともったまま、うまいぐあいには、うしろをむいていました。

いません。怪獣らしいものなど、どこにだっていやしません。



「ちえっ。」

日出男くんは、かいちゆう電燈をひろいあげて、どんどん歩きだしました。

「いたずらいうて、からかってみただけなんだけえ、日出^{ひで}を——。」

かあさんは、うしろからついてきますが、まだ、にやにやしているようです。

日出男くんは、おとなしく、まじめな子どもです。だから前谷のうちのばあやんが、「日出は、うそをいわんでいい子だけえ」と、よくほめてくれます。それなのに、かあさんにだまされたものだから、はらがたちました。それに、前谷のかあさんからもらった東京みやげで、おもしろくないこともありました。それらがかさなりあって、日出男くんは、ぶんぶんおこったのです。

「日出、足もとを、よくてらしてくれないけえ。」

かあさんがたのみましたが、日出男くんは、道をよくてらしてやるどころか、ピチッと、かいちゆう電燈でんとうをけしてしまいました。そして、いままでより、もっともっと急ぎ足いそに歩きました。

日出男くんの村は、広島県ひろしまけんの北にある油木ゆきです。島根県しまねけんとのさかいに近いところで、広島から、列車れっしやで、四時間もかかります。

山やまにかこまれた村ですが、村の北に、ひとときわ高い比婆山ひばやまがあります。その比婆山には、怪獣かいじゆうがいるらしいといわれています。

怪獣かいじゆうといっても、恐竜きょうりゆうだの、ゴジラなどではありません。すごく大きなサルだろうといううわさです。なかには、山人やまびとか、原人げんじんではないかという学者がくしやもいます。はっきりしたことは、まだわかりません。

からだは、茶色ちやいろの毛けでおおわれて、あごがとがり、三角形さんかくけいを上下あべこべにしたような顔かおだという話です。

前谷まへたにのかあさんは、十日ほど前に、怪獣を見ました。仕事しごとが休みの日

で、お寺へ出かけていき、その帰りがけたったそうです。

「お寺のおくさんとおしゃべりしすぎて、ちいと、おそくなってしまったんじや。お寺を出て、二の坂にかかろうかいうとき、畑に、なんかがいるのに氣いついたんじや。吉井のうちの畑だし、休みの日だったけど、やさいでもとりにきたんだろうおもうて、声をかけたんだ。ぼんじましてなあ（こんばんは）って。

ところが、へんじは、なんもない。そして、ゆっくり立ちあがったそいつ、うわさどおりの怪獣じゃないけえ。うすくらがりだったけど、かっこうはようわかったで。怪獣の、きらきら光る目で、おらをにらんだけえ。きもをつぶしたおらは、そこから、どうやってにげてきたか、とても思いだされんほどだあ。」

前谷のかあさんは、あう人ごとに、同じことを話していました。

前谷のかあさんは、日出男くんのかあさんのあねになります。そのせ